

## Post War Iraq

～医療支援の目線から～

The Impact of Occupation and Terrorism on the Health of Iraqi People

モハメッド・ヌーリ・シャキール さん (大阪大学大学院医学系研究科  
／イラク人医師)**2月11日(月) 18:30~20:00**

【経歴】1976年バグダード生まれ。経済制裁下のイラクのサダム・メディカル・カレッジで医学を学び、医師となる。2002年12月にヨルダンに行くが、2003年3月にイラク戦争開戦直後に帰国。医療活動に従事するも、何者かによる暗殺の脅迫を自宅に届けられ、出国を余儀なくされる。その後、イラクの医療・人道支援NGO「マーシー・ハンズ」アンマン事務所の開設に尽力。2006年1月、日本に短期滞在し、医師の目から見た経済制裁や占領の実態を報告。同年7月、再来日し、大阪大学医学部保健学科の研究生となる。現在、大阪大学大学院医学系研究科博士課程で病理学を専攻、癌研究に従事している。研究のかたわら、「マーシー・ハンズ」の日本の支援団体「フレンズ オブ マーシー・ハンズ」の活動に積極的に関わり、イラクと日本のかげ橋として、医師の視点からイラク情勢を報告するなど、講演活動も行っている。



## 大河が育む米・魚文化

～難民の食卓に見るイラクの食文化～

山尾 大 さん

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科  
／日本学術振興会特別研究員 (DC))**2月15日(金) 18:30~20:00**

2003年の米軍によるイラク侵攻、それに続く極度の政治的不安定に伴い、多数のイラク人が国内避難民あるいは難民になることを余儀なくされました。本講演では、イラク現代政治史を概観し、その後、イラク人難民の事例に引き付けながらイラクの食文化を紹介します。

イラク戦争後に、シリア・ヨルダンなどの周辺諸国でイラク人難民の調査を実施した際、彼らが魚料理店を次々と開設し「イラク人難民街」に魚が溢れている光景を目にして、驚きを隠せませんでした。

砂漠の乾燥地帯という印象が強いイラクは、実は日本の私たちになじみが深い食文化を持っています。それは、米と魚です。いうまでもなく、イラクには四大文明のひとつを支えたチグリス・ユーフラテス川があり、古代から「メソポタミア (二大河の間の地)」と呼ばれた所以です。二つの大河に挟まれた肥沃な大地は米作に最適で、アンバール米というブランドを生み出しました。さらに、大河が育む魚は、イラク人の食卓を彩るだけではなく、彼らのイラク人としてのアイデンティティの一部となっています。そうであるがゆえに、戦争とその後の政治的不安定によって難民となることを余儀なくされた後も、彼らは自身の食文化を保持し続けているのです。

